

いずれも受験勉強と考えて、力をつけることを意識して取り組みなさい。

★「完成古文」 十二ページ〜二十三ページ（一学期中間考査の範囲）

「錬成漢文」 十二ページ〜十九ページ（一学期中間考査の範囲）

前回の範囲はしっかりできましたか。書き込みをたくさんしましたか。書くことで頭が整理され、記憶が強化されます。引き続き、重要なことは調べて書き込みながら進めていきましょう。

★「重要古文単語315」小テスト不合格課題（前回の継続）

★「一問一答式日本文学史ノート」 四ページ〜十九ページ（前回の継続）

★「花山院の出家」予習（前回の継続）

以下、課題ではありませんが、受験に向けて力をつけたい人は是非やりましょう。プリントアウトできない人は、ノートなどに本文を書き写してください。それが面倒な人は、教科書に書き入れてもかまいません。

★「あだし野の露消ゆる時なく」文法&読解プリント

「養和の飢饉」のプリントはできましたか。恐ろしいことですが、あれは実際にあったことです。芥川龍之介の小説『羅生門』の主人公の下人は、まさにあの時代の京都で生きていたのです。現代の日本の食糧自給率を考えると、もしも食料の輸入が止まってしまったら、現代でも同じ状況が現出することが予想されます。恐ろしい。

さて、「養和の飢饉」でウォーミングアップできた人は、次は徒然草を読んでみましょう。教科書十八ページに載っています。傍線部を文法的に説明し、□の語句を「重要古文単語315」で調べ、教科書の注も使って自分で訳してみよう。難しいところはプリントに訳を書いておきました。いつも授業で訳すように、一語一語正確に訳してください。申し訳ないことですが、プリントに訳を書く欄がありません。ノートかレポート用紙に書いてください。ごめんなさいね。

★「無恒産而有恒心者」句法・用字&読解プリント

漢文も自分で読解してみよう。大丈夫、書き下し文を作るところからきちんとやれば、君たちならだいたいできます。手順は以下のとおりです。

① 教科書二四四ページの漢文を見ながら、ノートやレポート用紙などに書き下し文を書く。後で訳を書くことが出来る欄も作っておくとよい。

② プリント下段に、パンダを見て重要句法についてまとめる。

③ 教科書の注を見ながら、そして□の漢字についてパンダで調べながら、書き下し文をもとに訳していく。重要句法や重要語句の訳し方さえきちんと押さえておけば、あとは細かいところはあまり気にしなくてよい。どうしてもわからないところは、書き下し文をそのまま使ってもかまいませんから、とにかく最後まで訳してみよう。現代にも通じる政治の本質を述べた文章です。小論文対策としても知っておいてほしい視点です。

★「精選漢文」確認問題（前回の継続）

墓地の露(の)のように

はかない(命)が消える

あだし野の露消ゆる時なく、鳥部山の煙立ち去らで継続力 打消 副助 限定のみ、住み果つる

断定なり命

継続助

体言体語

順接仮定条件

火葬場の煙の(ように)この世から(立ち去る)

つなれ(命)

推量(ん)助

未接

文中に「いかに」など疑問系の副詞がある場合、文末は連体形になる。(古典文法 P.116 下段)

ならひなら

ば

いかに

もののははれも

なから

ひ

しめひめとした感動

世は定めなきこそ、**いみじけれ**。

誰がいつ死ぬか決まっていな(こと)

命あるものを見るに、人ばかり久しきはなし。

長生きする(生き物)

かげろふの夕べを待ち、夏の蟬の春秋を知らぬもあるぞかし。

(生き物)

つくづくと一年を暮らす**ほど**だにも、こよなうのどけしや。

こよなくのんびりしている

**飽**かず、惜しと思はば、千年を過ぐすとも、一夜の夢の心地こそせめ。

住み果てぬ世に、醜き姿を待ちえて**何か(は)せん**。

手に入れるほどの老人になるまで生きる

命長ければ辱多し。

恥ずかれない思いをすること

長くとも四十に足らぬ**ほど**にて死なんこそ、**めやすかる**べけれ。

その**ほど**過ぎぬれば、かたちを取づる心もなく、人に出で交じらはんことを

世間に出て人々と交際する

思ひ、夕べの陽に子孫を愛して、さかゆく末を見んまでの命をあらまし、ひたす

執着する

人生の終わり近くになつても

ますます栄えてゆく将来

ら世をむさぼる心のみ深く、もののははれも知らずなりゆくなん、**あさましき**。

孟子曰、「<sup>クシテ</sup>無恒産<sup>ノ</sup>而有恒心者、惟士<sup>ナス</sup>為能<sup>トス</sup>。」  
順接の單邊キ字  
送り仮名「シテ」がつく。  
なす  
とする  
よめる  
よめる

若民<sup>166</sup>則無恒産、<sup>163</sup>因無恒心。

苟無恒心、放辟邪侈、無不為<sup>110</sup>已。

及陷<sup>29</sup>於罪、然後從<sup>165</sup>而刑之、是罔民也。<sup>119</sup>

焉有仁人在位、罔民<sup>132</sup>而可<sup>111</sup>為<sup>142</sup>也。

是<sup>116</sup>故、明君制民之産、必使仰足<sup>108</sup>以事<sup>187</sup>父

母、俯足<sup>108</sup>以畜妻子、樂歲終身飽、凶年免

於<sup>29</sup>死亡、然後驅<sup>165</sup>而之<sup>28</sup>善。<sup>112</sup>

故<sup>164</sup>民之從<sup>112</sup>之<sup>112</sup>也<sup>119</sup>輕。

今也<sup>119</sup>制民之産、仰不足以事父母、俯不

足以畜妻子、樂歲終身苦、凶年不免於

死亡。

此惟救死<sup>132</sup>而恐不贍。

奚暇治礼義哉。

「A」はサ行変格活用動詞「Aす」、  
「B」は名詞「B」とします。  
読み

←  
惟<sup>たゞ</sup>A<sup>ス</sup>【限定】90  
惟だAするのみ ↑書き下し  
ただAするだけだ。↓訳

若<sup>レ</sup>B、【比況】97

苟<sup>シ</sup>A<sup>ス</sup>【仮定】84

無<sup>シ</sup>不<sup>レ</sup>A<sup>セ</sup>【二重否定】47

焉<sup>ク</sup>A<sup>セ</sup>也【反語】62

使<sup>ニ</sup>(B)A<sup>ラ</sup>【使役】82

不<sup>レ</sup>A<sup>セ</sup>【否定】38

奚<sup>バ</sup>A<sup>セ</sup>哉【反語】62

「養和の飢饉」解説③

また養和のころとかいう話だが、昔のことになったので（はつきりとは）記憶していない。二年の間、世の中が飢饉状態になって、「驚くほどのことがありました」。時には春、夏に日照りがあり、時には秋に台風・洪水など、「よくないこと」

「（飢饉）が続いて、米も麦も粟も黍も豆も「すべて実らない」。夏に苗を植えることをして、（それでも）秋に刈り入れて冬に（収穫物を倉に）収める「にぎわいはない」。これ（飢饉による飢饉）によって、諸国の人民は、ある者は（税が払えなくて）田畑を捨てて住んでいる土地を出ていき、ある者は（村の）家を捨てて（木の葉や山菜など食べるものもあるかもしれない）山に住む。（宮中でも）さまざま祈禱が始まって、

「並かどおりでない修法を（いくつ）も）行い、さるけいれども「たたくを（）利益」。都とはそういうものであるが、（衣食など）どんなことでも、みな、元をたどれば「田舎を離れて

している」の「またく」田舎から都に運ばれてくる物資が「ないので」、そのように（普通の）ように「ばかり

「体裁をとりつこううことができたろうか、いや、とり

くうきれない」。飢饉を「がまんしかねては

「さまざまな家財道具を片端から捨てるように（安値で

もいから売ろうと）「すくわけをり」。『またく目も

「わめる人はいない」。思いがけず（幸運にも）家財道具を食料と）交換する（ことができた）者は、黄金をどうでもよいものように扱って、粟（粗末な食料）を重要視する。乞食が道端にたくさんいて、嘆き悲しむ声は耳にいつばいになった（ほどである）。

「飢饉の）一年目は、「このように」してやっこのことで「暮らした」。翌年は、「立ち直る）ことができらぬ」と思

世の中の人々はみな「飢えてしまつたりで」、日があつにつれて（人々が）追い詰められていく様子は、少水の魚という比喩がぴったりである。しまいには、（贅食品である）笠をかぶり、足を布で包み（裸足ではない）身なりがよい、「思くぬい

」服装をしている者（貴族）が、ひたすらに家一軒一軒を乞食をして「まわら」。このように「困窮し、べの

はたし身がたがり、ぼうぼうな人々」が「歩きまわら

はと見るとすぐに倒れ臥してしまふ」。土俵のそばや、道端で飢え死にしているような者たちは、（何人なのか）数もわからない。（路傍に転がっている遺体を）取り捨てるやり方もわからないので、（遺体が腐乱する）悪臭がどこへ行っても満ち

ていて、（腐乱して）変化していく（遺体の）顔立ちや姿は、まともに見ることもできない（ほどひどい）ことがたくさんある。（普通の道路が）そんなのだから「まして」（以前から遺体の棄て場であった）河原などには、馬や牛車が行きかう「道さるも

「ない（くらいに）「なかさら」遺体がたくさんある。「身分が低い」庶民や山に住む樵や獵師なども（飢えて）

力尽きて（都まで薪を売りに来る）ことができないため、（都では）「薪までもとぼしくなっていくので」

「頼りたすも」（田舎の）知人のない人は、自分の家を壊して、（その木材を薪として）市場に出て売る。一人が持って出た（薪の）値段は（一人が）一日の命（をつなぐための食糧）に「さるも

十分ではない」という話だ。「不思議な事」は、薪の中に、赤い塗料がついたり、金箔銀箔などがところどころに見えたりする木がまじっていた、（その理由）を「言尋ねると」

「飢えて）どうすることもできない者が、古い寺にやってきて仏像を盗み、寺の仏事に用いる道具を壊して奪い取って、割り碎いた（もの）であるというよ。（よりによつて）「仏法の残った

木法の世界」に生まれてしまつて、「このようならい

ことを見ました」。『たそつしかりけし感動的なこと』もありました。別れることができない（ほど愛している）妻や夫を持つている者は、その（相手に対する）思いが（相手の自分に対する思い）以上に深い者が、必ず先に死ぬ。「その理由」は、自分の身は二の次にして（愛する）人を気の毒に思うために、たまに手に入つた食べ物も相手に譲るからである。「とうであるから」

「親や子がある者は決まったこととして親が先に死ぬ。また、母が息絶えたこともわからないで、「幼い子どもで、依然として

「やけり乳を吸いながら」（母の遺体に寄り添つて）横になつている子などもいた。

仁和寺にいた、隆暁法印という人が、このようにしては数もわからないほど（多くの人が）死ぬことを悲しんで、遺体の頭が見えるたびに、（遺体の）額に「阿字」を書いて、（あの世で幸せになれるように、仏との）「縁を結ばせて成仏させろ

ことをしなすべし」と。（隆暁法印が死者の）人数を「知らう」として、四、五か月（の間、遺体の数）を「数えたところ」

「都の中で一途通よりは南、九条通より北、京極通よりは西、朱雀通よりは東の、道端にある（遺体の）頭は、全部で四

万二千三百以上あつたということだ。まして、その（隆暁法印が遺体を数えた四、五か月の）前や後に死ぬ者も多く、また、（隆暁法印が遺体を数えた範囲の外）河原、白河、西の京など、いろいろの都のはずれなど（にあつた遺体）を加えて「いうならば

「（死者の数は）際限も「あらはずがな」。『まして（都の外）七道諸国は「なかさら」（多くの死者が出たの）だ。

養和の飢饉 解答①

また養和のことか、久しくなりて相国は時、二年が間、世の中飢渴して、

あましがこと侍りき。あるいは春・夏日照り、あるいは秋・大風、

洪水など、よからぬこともうち続きて、五穀ことごとく生ら

る営みありて、秋刈り、冬収むるそめきはなし。これによりて國々の民、

あるは、地を捨てて規を出で、あるは、家を忘れて山に住む。さまざまの

新り始まりて、なべてならぬ法ども行はるれど、さらさらそのしるしなし。

高のなほひ、何れをにつけても、みな、もとは田舎をこそ頼るに、絶えて

上るものなれば、さのみやは糧も作りあへず。念しわびつづきまき

まの財物かたはしより捨つる。かごとく、すれども、さらに目見立つる人な

し。だまたま、換ふる者は、金を軽くし、粟を重くす。七食、道のはとりに多

く、憂へ悲しむ声耳に満てり。

前の年かくのごとくからうして新れぬ。明るる年は、立ち直るべきが

と思ふほどに、あまりさへ寒霜から萎ひて、まざままに彫形なし。世の人み

なけいしぬれば、日を経つつ、穀まりゆくさま、少水の魚のたぐいになり。

はては望うち着、足ひき包み、よろしき安したる者、ひたすらに家ごとに

乞ひ歩く。かくわびしれたる者どもの、歩くかと見れば、すなはち

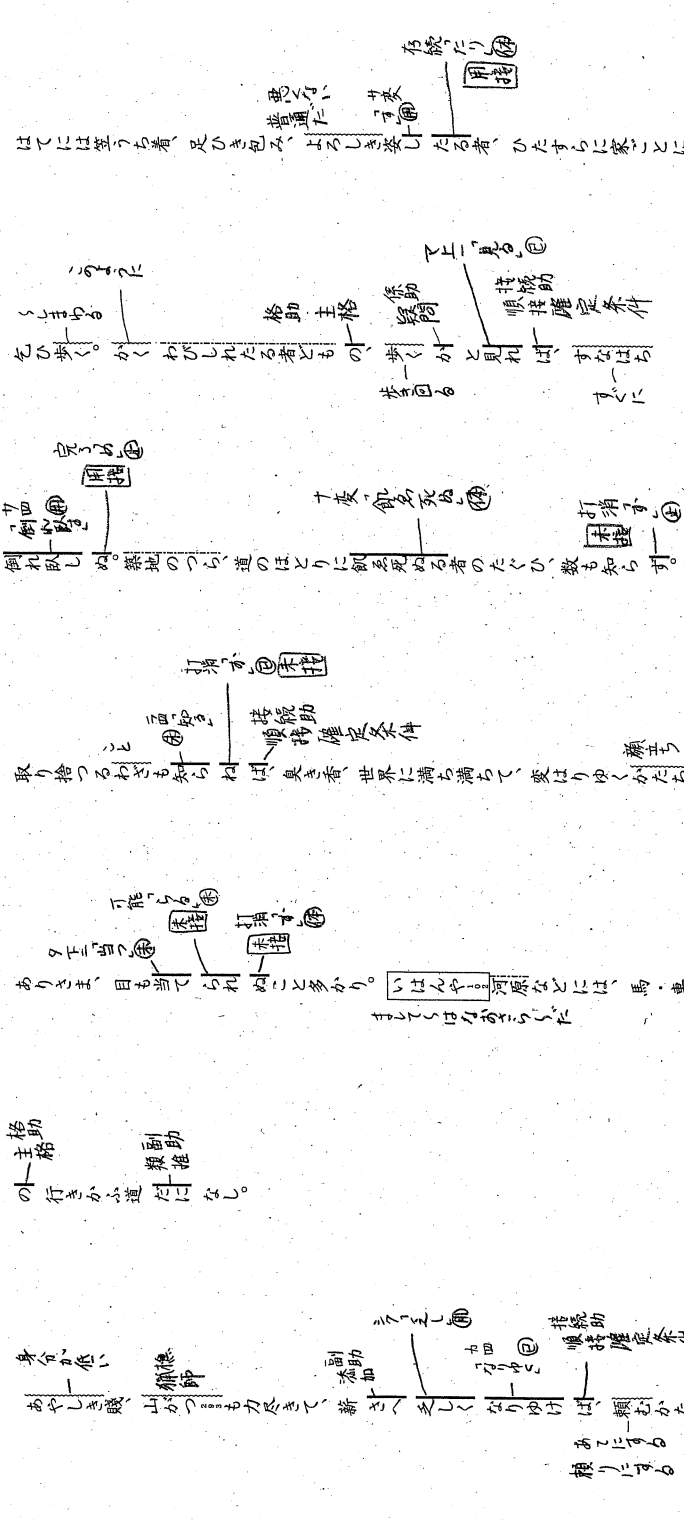
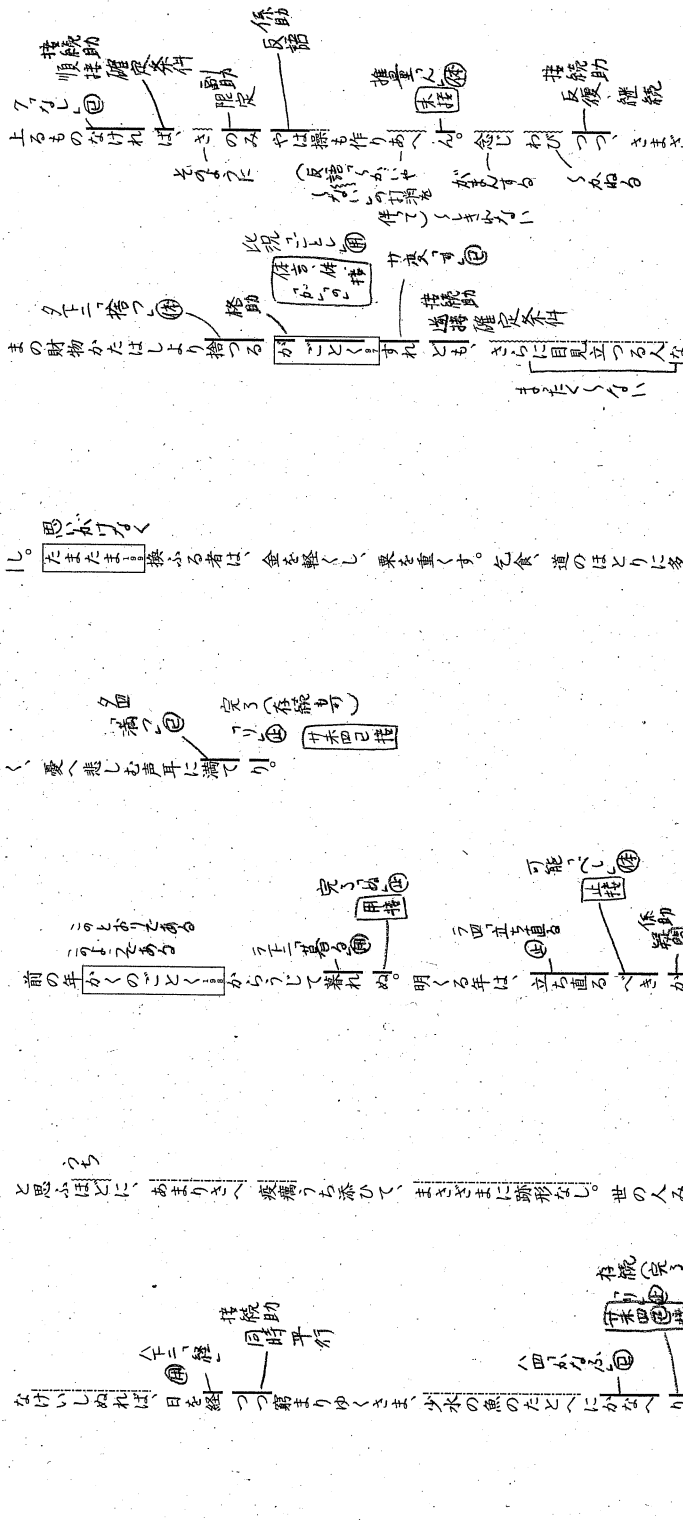
倒れ臥しぬ。樂地のつら、道のはとりに餓死ぬる者のたぐひ、数も知ら

取り捨つるれども知らぬ。奥き春、世界に満ち満ちて、変はりゆくがたら

ありさま、目も当てられぬこと多かり。いはんや、河原などには、馬・車

の行きかた道になし。

あやしき賤、山がつ、も力尽きて、新さへ乏しくなりゆけば、頼むかた



『養和の飢饉』解答②

なき人は自ら家をこぼれて、市に出て売る。一人が持ち出して来た

何一日外命に及ばずとを。あやしきことは、新の中に、赤き丹つき

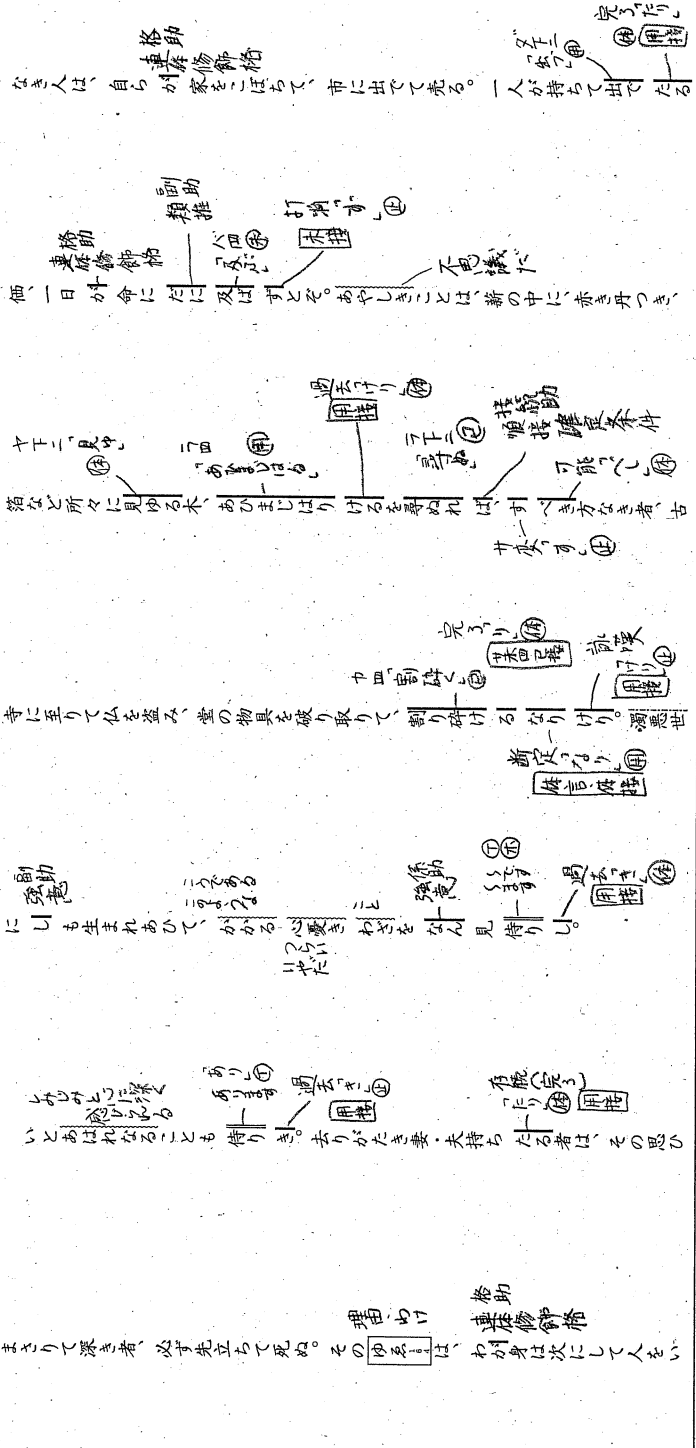
須など所々に見ゆる木、あまじは引けるを新ぬれば、引くべき方なき者、占

寺に至りて仏を益み、堂の物具を破り取りて、割り砕けるなりけり。悪悪世

にしも生まれあひて、かかる心憂きわざを、見侍りし。

いとあはれなることも、侍りき。去りがたき妻・夫持ちたる者は、その思ひ

まさりて深き者、必ず先立ちて死ぬ。その内は、わが身は次にして人さ



たはしく思ふ間に、まれまれ得たる、食ひ物をも俄に譲るによりてなり。さ

れば、親子ある者は、養まれることにて、親を先立ちける。また、母の命

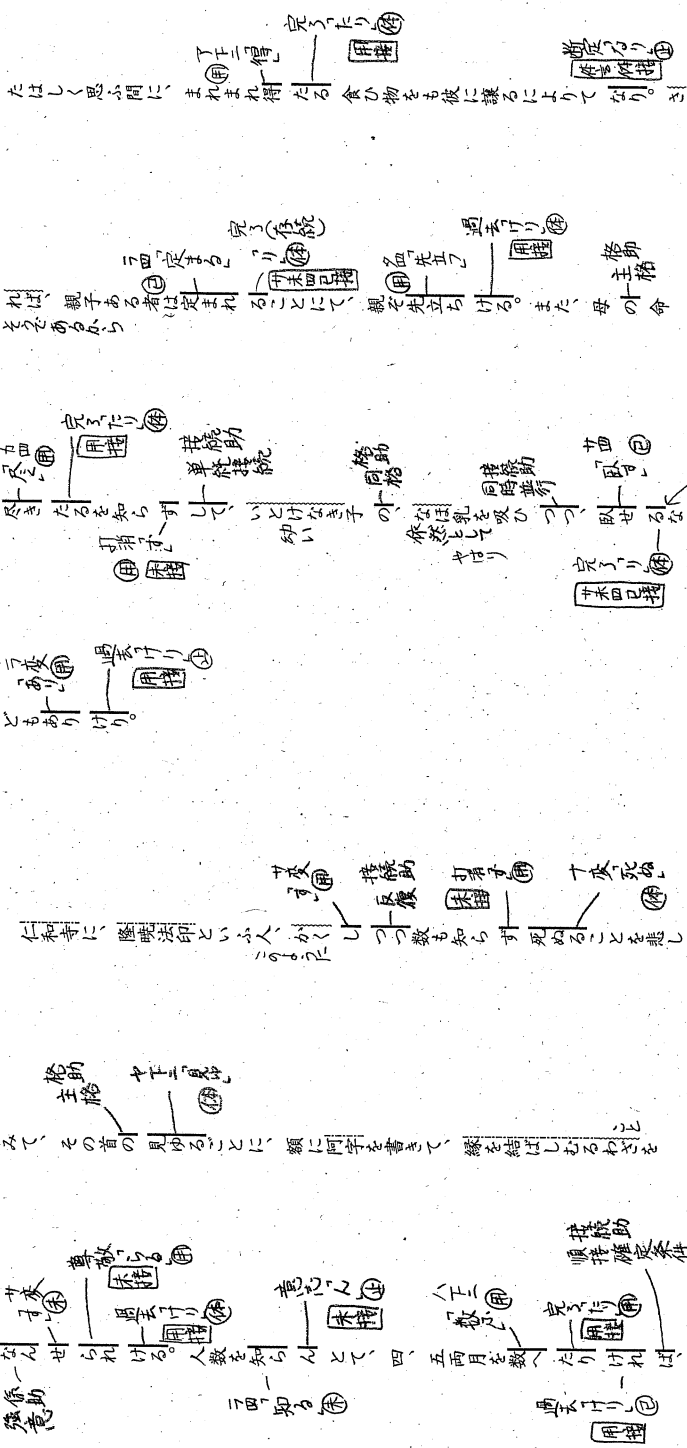
尽きたるを知らずして、いとけなき子の、幼い、依然として、吸ひつづ

どもありけり。

仁和寺に、隆慶法印といふ人、かくし、つつ数も知らず死ぬることを悲し

みて、その首の見ゆることに、額に阿字を書きて、縁を結はしむるわざを

なんせられける。人数を知らんとて、四、五両目を数へたりければ



京のうら、一条よりは南、九条より北、京極よりは西、朱雀よりは東の、道の

ほとりなる頭、すべて四万二千三百余りなんありける。いはんや、その前

ここに、るを禱うことができる。

後に死ぬる者多く、また、河原、白河、西の京、もろもろの辺地などを加へて

いはば、際限もあるべからず。いかにいはんや、七道講圖をや、

